

IV 若年教員研修部会

熟練教員の指導力を若年教員へ継承するために
－「若い教師の研修会」を通して－

1 はじめに

今年度は、各校においてコロナ禍における行事の在り方が検討され、再開に向けた取組が多く見られた1年となった。学校では、新しい日常が定着しているものの、教育課程・授業方法の改革、地域とともにある学校の実現、ICT活用学習、教員の大量退職・採用等、子どもたちや若年教員を取り巻く環境は変化し続けており、これらに対応していくことは急務とされている。

中央教育審議会では「『令和の日本型学校教育』を担う教師の育成・採用・研修等の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～」の答申を取りまとめ、本答申では、教師一人ひとりの専門性を高めるとともに、学校組織が多様な専門性や背景をもつ人材とのかかわりを常にもち続け、そうした人材を積極的に取り込んでいくことが重要であると示されている。本部会では、教職生涯を通じて学び続け、子ども一人ひとりの学びを最大限に引き出すとともに、主体的な学びを支援する伴走者としての能力を備えることができるよう、確かな指導力と豊かな人間力、組織的に教育課題に立ち向かう人材の育成をめざす「若い教師の研修会」を企画・運営し、坂出市の教員文化の継承を支えたい。

2 研究主題について

本年度の研究主題を「熟練教員の指導力を若年教員へ継承するために－『若い教師の研修会』を通して－」とし、共通研修と校種別研修を実施した。対象者は2年目～6年目の教員で、希望研修とした。対象者に行った事前アンケートでは、共通研修（講演会）に向けて①不登校等、困り感のある児童生徒への指導・支援の在り方について、②先輩教員への質問、③教員生活上の悩み（教科指導・学級経営・人間関係・その他）等を尋ね、受講者の現在の状況を把握した。それらを踏まえ、7月には共通研修①として市教育研究所「不登校・特別支援教育部会」による不登校・特別支援児童生徒への理解についての講話を市内の本研修対象者が所属する小・中学校とオンラインでつなぎ、Zoomを利用して行った。また、8月には附属坂出小学校で開催された「わくわく授業づくりワークショップ」に小学校の教員が参加した。11月には校種別研修（先輩教員の体験談から学ぼう）と共通研修②（座談会）を市教育会館で行った。座談会は、参加者の悩み別と小中連携を意図した異校種間交流の2部構成とした。

月	日	曜	事業・研修内容	月	日	曜	事業・研修内容
4			組織の編成 部会の目標	8	4 19 26	木 金 金	「若い教師の研修会」 「わくわく授業づくりワークショップ」（附属坂出小学校）
5	13	金	辞令交付式（坂出市教育会館：中止） 組織づくり 研究内容の検討	11	25	金	「若い教師の研修会」 先輩教員から学ぶ・座談会
6	30	木	本年度の研修内容について検討 研究紀要執筆分担（東部小学校）	1	6	金	研修会のまとめと総括 第1回目の原稿の推敲
7	29	金	「若い教師の研修会」講演会 豊島佳津子先生（川津小学校）	1	13	金	研究紀要の原稿の完成

4 発達障がいも背景にもつ不登校

- ・ 「自分を受け入れてほしい」「なかまに入りたい」という気持ちは強い場合もあるが、その特性から「なかま外れ」「いじめ」「からかい」の対象になりがち。
- ・ おとなしい、高機能のタイプは、周りに合わせて適応しようとするが、アイデンティティの乏しさから、またいじめの対象となったり孤立したりする。
(「どうすれば、うまくなかまに入れるか」と言われてもよく分からないし、できない。)
- ・ ファンタジー(こだわり)の世界に没頭し、幼児的な万能感にしがみつこうとする。
- ・ ネット世界(広く浅い不特定多数とのコミュニケーション)に傾倒しやすい。
- ・ 頑張れば何でもできると思い込み、必死になるが、現実感を伴わない。
- ・ 高すぎる目標にしがみついては達成できず、落ち込み、自己評価を下げる悪循環が生じる。
(混乱と自己喪失、身体的な症状が加わり、抑うつ的になると、不登校に移行しやすい。)

5 不登校の対応について

- ・ 人と場所に対する**安心感の回復**は、どの子も同じ。どうすれば安心できるのかは、個別に見極める。「ここなら安心」という場所が多数ある方がよい。(例)保健室、図書室等の居場所
- ・ 子ども自身が、期待する人物(親・支援者)に自分は受け入れられている、という感覚をもってもらうことが大切。
- ・ 養育者の気に入らないと思うことを自己主張でき、受け取ってもらう体験が大切。
(親が喜ばないことを言えるようになったら回復。言っても見捨てられないという安心感。)
- ・ 自分は万能ではないが、何もできないわけでもない、という発想へ

※ 適切な手当でスッと落ち着くのが発達系、一旦混乱が生じやすいのが被虐待系の傾向あり。

6 “甘え”を嫌う大人たち

子どもが「我慢ができない事＝甘えている」と考え、怒る大人は、地道な作業が苦手な人が多い。本当は我慢が苦手なのに、納得している顔をして、心は全然納得できない。我慢する癖のある子は、周りは「いい子」と思ってしまうが、ずっと我慢をしていて、限界になった時に大人にとって不都合な甘えが現れる。それは、その子にとって「育ち直しの転換期」であり、心が必要な栄養をためるために重要な時期。甘えのタンクを満タンにして充電できた子どもは、自ら困難にチャレンジしようと向かい始める。単に、甘えていると思わず、その言動の裏から感じ取れる本当の心の叫びに耳を澄ませることが大切。

※ 子どもの自立とは、主体的な選択に基づいて、他者に適度に依存しながら、自身にとってよりよい生活を探索できること。養育者による安心の提供に依存しながら、養育者に対し適度な自己主張を探索すると共に、養育者の社会に対する信頼を通して自身を社会化していく過程。

※ 「タチの悪い甘え」は、その始まりに、大人が自分の都合のよい方向に導くために行った「押し売りの親切」によって、子どもが勘違いして覚えてしまったものが多いように思う。

7 質問タイム・まとめ

- A 不登校児童・生徒への対応は、担任一人で抱え込まず、みんなでサポートしながら、次のステップに進めるようにする。カウンセラーやソーシャルワーカーなどとの連携をすすめる。
- A 不安や焦りを共感的に受け止めてもらうことで落ち着く。話を聞く余裕がある人が、受け止める。落ち着いて、納得したら、回復しやすい。自信が出るまで、支援・サポートを続ける。
- A 教員はすぐに結果を出したがるが、長い目で見ると、まずは安心・安全な居場所づくりから。
- A アンテナをはり、子どもの感情・心の声を知り、幅広い対応を心がけることが大切。

(2) 校種別研修 (小・中学校)「先輩教員の体験談から学ぼう」

日 程：令和4年11月25日(金) 14:35～15:15 会 場：坂出市教育会館

講 師：坂出市立東部小学校 教諭 岡谷 祐介、坂出市立白峰中学校 主幹教諭 福家 見和
本研修では、これまで教員としての様々な経験から学んできたことや、子どもへのかかわりで大切に考えていること、子どもたちや同僚にかけられた言葉から学び、実践していることなどについて講話をいただいた。

■ 岡谷祐介先生

1 効率のよい教材研究≠簡単で、早くできて、楽な教材研究

【授業づくりの基本的な考え方】

- (1) 学習内容の明確化
- (2) 学級の児童の実態
- (3) 単元構成や課題設定の工夫 (学びがいのある学習過程)
- (4) 学習内容が身に付くような手立てや学び合いの工夫 (方法的な視点から)
- (5) 実際の授業を通しての改善

※教師がこれらの内容を明確に理解し、教材研究を行うことこそが効率のよい教材研究といえる。

2 困った子ども=困っている子ども

【子どもをほめるための視点】

ほんの少しのことをおおげさにほめる。当たり前な行動や言語でも、すごく貴重なことのように取り上げる。怒ったり厳しくしたりした後こそ、チャンスタイム！

★些細な変化を見つける目を養うことが大切である。

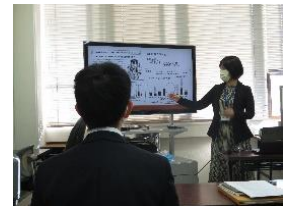
■ 福家見和先生

1 若年教員の時期に体験を通して学んだこと

- ・ 生徒のつぶやきから、教師からは「1対多」であるが、生徒からは「1対1」であることに気づき、個に応じた丁寧な対応を心がけるようになった。
- ・ 授業力を高めることは、教師力を高めることに直結しており、他の先生方の授業を積極的に見に行き、試行錯誤しながら自分のやり方を確立していくことが教師としての成長につながる。
- ・ 組織の一員としての自覚をもち、新しい仕事にもチャレンジしてほしい。困ったときには遠慮なく相談すればよい。その時に、周りから助けてもらえるような人になってほしい。

2 学級経営について

- ・ 生徒を「見る」チャンスはたくさんある。一人ひとりの活躍を見逃さず、それをほめることによって、生徒の「見てくれている」という安心感と信頼関係につながっていく。
- ・ どうやったら生徒の小さな声を拾えるかを経験しながら学び、きちんと正しく叱り、ちゃんと褒められる教師になってほしい。
- ・ 生徒が活躍できる場面を工夫して仕掛け、生徒自身が自律した学校生活を送れていると感じられるように支えるのが指導者としての教師の在り方である。



受講者は、岡谷先生や福家先生のお話から、多くのことを学ぶことができた。教材研究をはじめ、これまでの実践を振り返り、子どもの思いに寄り添える教師をめざそうとする意識が高められるとともに、自分なりに考えて工夫したり、チャレンジしたりすることで成長していきたいという前向きな気持ちになることができる有意義な時間となった。

(3) 共通研修（小・中学校） お悩み解消座談会（15:20～16:15）

市内の小中学校に勤務する若年教員が自分の悩みを打ち明けたり相談し合ったりすることで、お互いにつながり合い、今後の教員生活に役立てることができればと考え、実施した。

課題(悩み)と話し合いの内容

【小学校】学習規律を守らせるにはどのようにすればよいか。学級を飛び出す子どもがいる。飛び出した子どもは気になるが、教室の子どもたちも気になる。双方にどのように対応すればよいか。

→ 低学年であれば、リズムに合わせて学習準備をさせたり、話を聞く、書くなどのタイミングを知らせたりする。教室を飛び出す子どもとは、「10 数えたら帰っておいで」などの約束をする。約束の内容を変えながら、少しずつ子どもとの距離を縮めていく。飛び出した子どもに対して先生がどう接しているかを他の子どもは見ている。どちらも大切にしているという姿勢で対応する。

【中学校】子どもの見取りは大切だが、どのような場面で、どのようにするか。

→ 授業中だけでなく休み時間などに、子どもの表情や話の内容にいつもと違う様子がいないか注意する。校外で誰とどこで遊んでいるかなどの話も参考になる。小学生であれば、外遊びの時間に話したり、縄跳びなどを一緒にしたりしながら話をする中で、子どもについての情報を得ることができる。



【異校種での座談会】

最初は緊張している様子だったが、時間がたつにつれて和気あいあいとした座談会となった。座談会後のアンケートには、「同年代の方と話すことを通して、異校種での悩みを聞き、いろいろなことに悩んでいるのだと感じた」「自分自身の悩みとはちがう話もあったが、その中でも多くの工夫や新たな気づきを得られた」などの感想が書かれており、リラックスしながらも有意義な時間を過ごすことができたようであった。

4 成果と課題

今年度で9年目を迎える「若い教師の研修会」は、今年度も感染防止対策を講じた上で、開催方法や内容等を検討し、実施した。共通研修①の講演会は、「不登校・特別支援教育部会」の協力を得てオンラインで行い、校種別研修の「先輩教員の体験談から学ぼう」と共通研修②「座談会」については、県の感染状況が落ち着いた11月下旬に行った。なお、附属坂出小学校で8月に開催された「わくわく授業づくりワークショップ」も研修の機会として提供いただき、26名が参加した。

【成果】

- 豊島先生の講演会後のアンケートより、不登校への理解が深まり解決の糸口を見つけることができたことや、多様な見方・考え方を示し、優しく諭していただき、自分の心が軽くなったなど有意義な話だったことが伺えた。2学期からの子どもとのかかわりを見直すよい機会となった。
- 校種別研修や共通研修②では、異校種や他校の若年者と交流を行い、日頃困っていることや悩んでいることを聞き共感したり、互いにアドバイスをしたりすることができ、参考になったことや新たな気づきがあり、大変貴重な時間となった。

【課題】

- 感染状況により実施が困難となる集合研修ではあるが、オンラインでは十分に伝わらない内容や様子もあり、状況の把握と綿密な計画、日程の変更等にも柔軟に対応できるような準備をしっかりと行う必要がある。
- 若年教員にとって、意欲を高めることのできる魅力ある研修内容となるよう取組を工夫するとともに、教師が創造的で魅力ある仕事であると再認識し、「新たな教師の学びの姿」の実現に向けた一助となるよう努めたい。